

## ロマの起源 : 一つの仮説

その他のタイトル	Die Herkunft der Roma : Eine Hypothese
著者	井上 勉
雑誌名	独逸文學
巻	48
ページ	263-272
発行年	2004-03-19
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00018085">http://hdl.handle.net/10112/00018085</a>

## ロマの起源

### — 一つの仮説 —

井 上 勉

15世紀までにすでにビザンティン帝国においてエジプトから来た者だとしてその存在が知られ、15世紀に入ると中央ヨーロッパや西ヨーロッパにおいてエジプトから来た巡礼者だと自称してあちこちに現れ、そして現在全ヨーロッパに及んで存在している人間集団、相互にじつに多様な相違を示しながら、しかし核心部分で共通の起源を指し示しているさまざまなグループからなる人間集団の起源を特定することは困難だとする意見があるが<sup>1</sup>、しかしそれでもその起源をめぐってさまざまな説が行われている。

その中で、イアン・ハンコック<sup>2</sup>はロマニ語 (Romani)<sup>3</sup>の語彙における特殊な軍事用語を手がかりに、同じような軍事用語を使っていた兵士集団を推定することで、ロマとロマニ語の起源について次のように主張している。1001年から1027年にかけてのガズニー軍のインド侵入を阻止するために、多様な言語や方言を話す多数の異なった民族集団からなる部隊が編成され、これがイスラム軍と戦いながら、西方へと移動し、インドを出た。「人種的、言語的に混成のこの軍事集団が11世紀はじめに発祥の地から西へ西へと移動して、その過程で独自の民族的アイデンティティを獲得するようになった。ロマニ語が形成されはじめたのもこの時期である」と彼は述べる。

ハンコックはこの集団がペルシアから小アジア、バルカン半島を通っ

---

1 例えばアンガス・フレーザー『ジブシー——民族の歴史と文化——』水谷驥訳 2002年（原著は1992年出版）平凡社 46-47ページ、および、ジュール・ブロック『ジブシー』（文庫クセジュ）木内信敬訳 1973年（原著は1953年出版）白水社 48ページ参照。

2 テキサス大学教授。アメリカのホロコースト記念評議会でロマを代表。

3 Rromaniと書き表す仕方もあるが、ここではRomaniとする。

てヨーロッパ全域に広がってゆき、その過程で人間と言語の混成が進んだという。彼によれば、この集団は「時間の経過とともに、ヨーロッパのさまざまな住民と影響しあい、広く分散した集団に細分化していった結果として、今日のロマは大きな全体を構成する異なった民族集団の連続体となっている」<sup>4</sup>。

水谷驍は、ハンコックのこのようなロマの起源に関する説は言語学的な証拠のみにあまりにも深く依拠しすぎているのではないかと懸念を呈している<sup>5</sup>。

さて小論は、今日包括的にロマ<sup>6</sup>と呼ばれるようになってきている、さまざまな相違を内に含んだ民族集団の起源についてのマルセル・クルチアットの研究の要点を紹介するものである。

上に触れたように、ハンコックはガズニーのスルターン・マフムードのインド侵入がロマとロマニ語の発生のきっかけを与えたと見ているが、クルチアット<sup>7</sup>によれば、エリック・メイエもロマのインド脱出とマフ

---

4 Hancock, Ian: *Myth and Reality*, 1999. 注5の文献による。

5 デーヴィッド・クローウェ『ジプシーの歴史——東欧・ロシアのロマ民族——』水谷驍訳 2001年 共同通信社 444-446ページ。

6 このヨーロッパ全域に散在しているインド起源の人間集団は大きくロマ（東ヨーロッパの「ジプシー」）、シンティ、カレーの三つの流れに分かれているが、この下位区分としてさまざまな呼び名の多数のグループが存在する。これについては次を参照。井上勉『ヨーロッパ・ロマの起源、種々のロマ・グループ、そして新たなアイデンティティ形成』（『徳島文理大学比較文化研究所年報』20号 [2004年] 1-15ページ）。

7 国際ロマ連合の言語部門理事。ここで参照している文献は著者から筆者（井上）に個人的に送られてきたもの。Courthiade, Marcel: *The Rromani People's Origins: Chronicles and Legends*. これのごく一部が省かれたものが次のサイトで読める。  
<http://www.globetek-networks.com/roma/history.htm>

初出は次の大学教科書。Itu, Mircea/Moleanu, Julieta: *Cultura si civilizatie Indiana*, University of Bucharest, 2001. 大幅にアップデートされた英語版が *Gypsies: from the Ganges to the Thames* の表題で University of Hertfordshire Press から出版の予定という。邦語文献では次のものがある。『ロマニ語の言語政策——複数国家に散在する少数民族の対応——』（永田潤編訳）三浦信孝・糟谷啓介編『言語帝国主義とは何か』2000年 藤原書店 217-237ページ。

ムードのインド侵略との関連を指摘している。そのメイエの指摘によって、ロマのインド脱出の出発地とその時期がより詳しく明らかにされる。

クルチアッドは、メイエがロマのインド脱出とアラブ人の年代記編者アル・ウトビ<sup>8</sup>の書き残したテキストとのつながりを指摘したことが、そのロマのインド脱出の出発地ないし理由を詳しく決めるきっかけとなったという。

アル・ウトビの『ヤミニの書』の問題の一節は、短いものではあるが、従来の研究が依拠していた文献よりはるかにはっきりとした叙述となっている。それはマフムード軍のずっと東の方に達する襲撃、名高い都市カナウジ<sup>9</sup>にまで達する襲撃について述べている。

11世紀の初め頃、カナウジはガンジス川に沿ってラクナウとアークラーの近くまで広がって、北インドの知的中心であった。そのカナウジに、1018年から19年にかけての冬、ガズニー（今日のアフガニスタン）から来た侵略者が襲いかかった。これはその侵略者の最初のインド襲撃ではなく、以前のはパンジャーブとラージャスターンにまで及んだだけであった。今回はしかし人口5万3千の主要都市カナウジにまで侵入し、1018年12月19日には「富者も貧者も、色の白い者も黒い者も、(……)その大部分は名士、芸術家、工芸家であった」が、全住民を捕らえて、「全家族を」ガズニーとカーブルで売り払った（アル・ウトビのテキストによる）<sup>10</sup>。後に、ホラーサーンとイラクはカナウジの住民であふれてい

8 アル・ウトビ (Abu Nasr Al-'Utbi [961-1040]) はガズニーの君主スプクティギーンの、そしてその息子のイスマーイルの秘書を務め、その後マフムードの栄光を称える『ヤミニの書』を書いた（クルチアッドによる）。

9 カナウジは現在、ウッタール・プラデーシュ州中央部の地方都市。カナウジは7世紀、ハルシャ・ヴァルダナの治世下に最盛期に達した。当地を訪れた玄奘によれば、当時、カナウジには100以上の仏教寺院と200のヒンドゥー教寺院があった。8-10世紀にかけてはラージプート諸王朝の一つ、プラティーハーラ朝がここに首都をおき、歴代の王が芸術を愛好し、ヒンドゥー教とともに仏教も保護したので、町は古代北インドの一大文化中心地となった。

10 マフムードはほかに385頭の象や金、ルビー、真珠、あるいはその他の宝物——カナウジの200の寺院から略奪した——で一杯の二輪戦車を運び去った（クルチアッドによる）。

たようである（同書）。

つまりメイエないしくルチアッドによれば、ガズニーの征服者マフムードが1018年12月19日にカナウジに侵入し、その住民をカーブルへ連れ去ったことが、今日ロマと呼ばれる人々の起源となっているというのである。したがってロマの原郷はカナウジであり、ロマの起源は1018年から19年にかけての冬の、カナウジからの連行にあるということである。クルチアッドは、以下のように、この事件と関連すると思われる歴史的事実、また現在も見られる事実、あるいは言語学的事実を種々指摘して、今いったロマの起源に関する仮説を支えようとする。また逆に、ロマの起源が今いったことにあるとして、その上でそれに関連すると考えられる事柄をクルチアッドは列挙しているともいえる。

- ・元の住民が本当に種々の人々から構成されていたとすれば、「色の白い者も黒い者も（light and dark）」という記述がロマの種々のグループで見られる肌の色の多様性の説明となろう。おそらく多数のラージプート族<sup>11</sup>がカナウジにいただろう。この住民たちは元々の住民とは無関係であったが、彼らの功績によりクシャトリアの身分にまで上昇していた。したがって、彼らがカナウジの住民のうち、肌の色の黒い部分を成していたかもしれない<sup>12</sup>。

11 原注。カナウジはハルシャが非暴力に転向する前は好戦的な勢力で、ラージプート部隊をその軍隊に編入していた。ラージプートは恐るべき戦士たちで、その出身は、一部は6世紀にフーナ族とともにやってきた中央アジアからの侵入者であり、また一部はガンジス河谷の端の森林地帯の原住民であった。

12 ヨーロッパ人がロマと最初に出会ったとき、ロマの肌の色をいうのに使った「黒」という表現は、客観的事実についてのものよりも、この肌の色を当地の定住民がどう知覚したかについての情報を我々に提供する。新来者の中で、もっとも色の黒い者たちと眼に見えて黒い者たちがヨーロッパの住民の想像力をかきたてただろうことは明白である。その後、写真家たちはそのイメージに固執していつも黒い肌の人々を選び、このことが公衆の想像力の中に「黒い人々」としてのロマのパターンを次第に生み出していった。ちなみに、ポーランドではロマは「白いロマ」と「黒いロマ」を明確に区別するが、これはそのロマがどのグループに属しているか、すなわち平原のロマか、それとも山岳部のロマかによるのである。実

- ・捕らえられて奴隷となった者たちがあらゆる社会的階層の出身者だったことから、彼らがヨーロッパに到着したとき、王や皇帝、教皇などのような重要で影響力のある人々に容易に引き合わせられたことの説明がつく。ロマの中にはカナウジの名士たちの子孫<sup>13</sup>がいたことがその理由である。フランス人のインド学者ルイ・フレデリックはカナウジの住民の大部分が名士、芸術家、工芸家、武士から構成されていたと見ている。
- ・元々の連れ去られた住民の間のこの社会的多様性がまた、脱出後千年近い今日に至るまでのロマニ語の活発さの説明となるかもしれない。社会言語学が示すように、流浪の民が種々様々な社会的背景をもって

---

際は違うグループの肌の色の濃淡に眼に見える相違はない。ここで問題になっているのは色の象徴的な使用であり、これは歴史のある時点では意味があったかもしれないが、今日では無意味なことである。以上、原注。インド人の肌の色が明るい色から黒い色までさまざまであることに關して、辛島昇はこう書いている。「インドでの問題は、人々の皮膚の色が、非常に白い方からたいへんな黒さまで、連続しているところにある。アメリカの場合のように、白人と黒人がはっきり分れるのではなくて、やや白いとか、かなり黒いとか、程度がさまざまで、同じ兄弟でも、兄は黒いが、弟は白いといったことがある。(……)ではどうしてインドの人々は、そのように皮膚の色がまちまちだったり(……)するのであろうか。それは一口でいえば、民族の移動によるものである。すなわち、複数の民族がインドにやってきて、長い間共存し、かつ混じりあった結果なのである。」辛島昇(監修)『世界の歴史と文化 インド』1992年 新潮社 12-13ページ。また、第3回世界ロマ会議に出席した相沢好則は、世界12カ国から集まった約300人のロマの代表の「外貌は、ほとんど白人に近い人から褐色の肌をした人まで、千差万別であった」と報告している。相沢好則『ロマ・旅する民族——ジプシーの人類学的考察の試み——』1996年 八潮社 68-69ページ。

- 13 1417年、ボヘミアを通してヨーロッパ各地に赴く途上の大規模なロマ集団の「指導者のきわだった高潔さ」への言及が残されている。チェコ人ジプシー学者のエミーリア・ホルヴァートヴァーはこのロマ集団は伝統的な仕事をする原始的な遊牧部族にしてはあまりに洗練されすぎていたと指摘しているという。彼らは事実上の神聖ローマ帝国皇帝だったハンガリー国王ジギスムントおよびローマ教皇マルティヌス五世の安全通行証を携えていた(クローウェ 2001年 65-66ページ)。

いればいるほど、その民はより強力に、かつより長くその元の言語を伝えつづける。

- ・ ロマの祖先が後にした地域の地理的単一性が、ロマニ語におけるインド的要素の目だった首尾一貫性の説明となる。ロマニ語の諸方言間の主要な相違はこの言語のインド系要素にではなく、ヨーロッパにおいて借用された語彙の中に見られる（ヨーロッパの借用語はたいてい日常的現実の新しい概念〔衣類、食べ物、動物相、植物相〕や行政上、科学技術上の進展に関するそれ〔市役所、休日、ねじ回し、スタンプ、待合室、印象などなど〕を言い表す必要に迫られてロマニ語に入り込んだ）。
- ・ 当時の洗練されたすべての都市と同じように、おそらくカナウジには多数のドームバの芸術家<sup>14</sup>がいただろう。北インドの知的・精神的中心都市として、カナウジはたぶん大勢の芸術家を引き寄せ、その多くはドームバだったと思われる。さて、カナウジの住民がホラーサーンや隣接地域で離散したとき、ドームバの芸術家たちは名士や工芸家たち以上に地域の住民の想像力に痕跡を残したのであろう。ドームバという名前がカナウジから来た全外国人グループを指すのに拡大されたことからこう推測される。この全グループがのちに自分たち自身のことをいうのに、インド人を意味するより一般的な名称のシンドに対立する自称名としてこの名前を引き継いだのかもしれない。
- ・ このグループの人々がおもに名士、芸術家、工芸家といった都市地域の出身者だったという事実が、今日農業分野で働いているロマの数が非常に少ないことの説明になるかもしれない。「この地域の土地は肥沃

14 ドームバ (Domba) は一般には楽器の演奏や歌を職業とする低いカーストの集団とされているが、クルチアッドはこの集団の幾人かとカシュミールの王子との友情を指摘して、この集団はけっして一般にいわれているような卑しむべき身分の者たちではないと強調する。以上原注。その友情ないし交友については12世紀のインドの歴史家カルハーナの主著『カシュミール大年代記』に触れられているそうである。これについては、ジュール・ブロック (1973年) 42-44ページも参照。なお、DombaのDの音がRの音に変わってRombaとなり、ここからさらにRomaとなった。

で生産能力に富み、収穫量が多く、気候が温暖である」にもかかわらず、「当地域の住民で農業に従事している者は少ない」と中国人の僧玄奘は書き留めている。

- ・ある小グループがこの侵略を逃れてベナーレスに移動し、しかしその原住民からの圧迫によってこの地も去り、結局ランチャー地域に定住したようである。ここの人々は他の部族とのコミュニケーションに使われる特殊なインド語であるサドリー語<sup>15</sup>を話す、このサドリー語が、この言語の話者とロマニ語の話者との間でもっとも容易に意思疎通できる言語であるらしいことはここで言及する価値がある。
- ・サドリー語の話者は特別な儀式のとき、飲む前に、「山脈の向こう側の風に連れ去られた我らの兄弟のために」と言いながら少量の飲み物を床に注ぐことがある。この兄弟たちというのはマフムードに捕らえられた者かもしれない。
- ・カナウジの守護女神はカーリーであった。カーリーはロマの人々の間で今日でも非常に人気のある神格である。くわえて、カナウジの前の名前であるカーニャクブジャは「せむしで足の不自由な乙女」という意味であった。この驚くべき名前の起源はクリシュナを崇拜する敬虔な不具者のあだ名において見られる。この不具者が自分の足に熱烈に聖油を塗ってくれることへの感謝として、クリシュナはその者に美しく健全な体を返してやった。実際、「せむしの乙女」は、カーリーの別の化身である戦いの女神ドゥルガーを指すのに用いられた名称の一つにすぎない。つまり、カーニャクブジャ（せむしの乙女）＝ドゥルガー＝カーリーという平行関係を指摘できる。
- ・ホラーサーンですごした時間（1世紀かそれ以上）がまた、ロマニ語の語彙に統合されたペルシア語の語幹の数（約70。ちなみにインド語の語幹数は900、ギリシャ語の語幹数は220）の説明となろう。ホラーサーンはペルシア語圏であった。
- ・ロマニ語とカナウジ地域の言語（しかもこれとのみ）をつなぐ三つの言語学的特徴として次の点が挙げられる<sup>16</sup>。

15 サダーニー語ともいう。

16 ウェブ版ではこの箇所が省略されている。



1. すべての現代インド・アーリヤ語の中で、ブラジュ方言（ブラジュ・バーシャー方言とも呼ばれる。カナウジのすぐ西隣の地域に約1500万人の話者をもつ）だけがロマニ語とともに人称代名詞三人称単数で二つの性を区別する。すなわち、男性（「彼」）はブラジュ方言では *jo* および *vo*（古代ブラジュ方言ではたぶん *o*）、ロマニ語では *ov*、*vov* ないし *jov* であり、女性（「彼女」）はブラジュ方言では *jā* ないし *vā*、ロマニ語では *oj*、*voj* ないし *joj* という。一方、他のインド・アーリヤ諸語は両性に対して一つの形を持っているだけであり、通常 *jé* ないし *vé* という。
2. すべての現代インド・アーリヤ語の中で、カナウジ地域の方言とブラジュ方言ならびにネパール語（ネパールはカナウジから60マイルしか離れていない）だけが男性名詞と形容詞の語尾として *~o*（あるいは *~au=~ō*）の形を持つ。これはロマニ語においても *~o* となる。例：*purano*（「古代の、古い」。他のインド・アーリヤ諸語では *puranā*、ロマニ語では *purano*）、*taruno*（「若い」。他のインド・アーリヤ諸語では *tarunā*、シント方言では *tarno*、ロマニ語では *terno*）。
3. すべての現代インド・アーリヤ語の中で、アワディー方言（カナウジの東の広い地域で約200万人の話者がある）だけがロマニ語と同様に所有格後置のための別形の長い形を持っている。両者の間に所有格後置という現象で厳密な平行関係があるだけでなく後置形も同一である。すべてのインド・アーリヤ諸語に共通の短い形（*~kā*、*~kī*、*~kē*）に加えて、アワディー方言は *~kar(ā)*、*~kerī*、*~kerē* という長い別形を持っている。このことは多くの古いロマニ方言も同様である。例えばマケドニアやブルガリアのロマニ方言ではこれは *~qoro*、*~qiri*、*~qere*、スロヴァキアやロシアでは *~qero*、*~qeri*、*~qere* となる。この形はシント方言では *~qro*、*~qri*、*~qre* に縮減している。

クルチアッドは上の諸点を挙げたあと、まとめとして次のように書いている。ロマニ語は大きく方言化することもなく、アジア的要素の統一性と同質性、ならびに種々の形態の顕著な安定性を示していることが、

元のロマ住民がすべて単一のインド地域、地理的にかなり限定された地域から来ていることを明確に指示している。実際、ロマニ語の語彙のうち、アジア的部分においては<sup>17</sup>、一つの動詞語尾に関して、重要な方言境界線 (isogloss 等語線) が一つ見られるだけである。一方、他のすべての方言境界線は、後にヨーロッパの地において現れたものである。ロマの人々の共通のルーツがインドの都市カナウジの出身者にあるとすれば、これは逆にこの言語学的データを確証するものである。

クルチアッドはこう述べてその論考を締めくくる。すなわち、ロマのインド脱出の出発点がかなりの程度決定されたので、この大移動の次の段階がどういう状況で起こったのかを明らかにすることに研究の焦点が移る。特に、ホラーサーンとその隣接国において奴隷状態にあったカナウジの住民がいつ、そしてどのようにして再び集まり、西へ、すなわち小アジアとバルカン半島への道についたのかということである。

ロマの起源に関するさまざまな意見<sup>18</sup>はみな仮説にとどまっている。ここに紹介したクルチアッドのものも一つの仮説である。彼の言語学的説明は説得的に見えるが、ここにいわれているようにヨーロッパのロマの起源が1018年12月19日に起こったカナウジの全住民の連行にあると

---

17 原注。ロマニ語において会おうインド語、ペルシア語、アルメニア語、グルジア語起源のすべての言語的資料を「アジア的部分」と呼ぶ。さらにはギリシア語起源のものもある程度そう呼ぶ。というのはロマニ語におけるたいていのギリシア語的要素はロマが小アジアを通過したときに借用されたものだからである。知られているように、小アジアには当時ギリシア人とアルメニア人が住んでいた。

18 ここで先に言及したハンコックのもの (*Myth and Reality*, 1999) 以外に最近の研究を二つ挙げておく。

Lee, Ronald: *The Roma: Origins and Diaspora*, 2000.

[http://www.geocities.com/aboutindia2000/article/where\\_do\\_Gypsies\\_come\\_from.htm](http://www.geocities.com/aboutindia2000/article/where_do_Gypsies_come_from.htm)

Haliti, Bajram: *Exodus of the Romany from the Original Homeland India: Historical Development on the Origin of the Romany and Causes for Movement from India*, 2003.

[http://groups.yahoo.com/group/Roma\\_Daily\\_News/message/1113](http://groups.yahoo.com/group/Roma_Daily_News/message/1113).

すれば、カナウジは仏教文化が栄えた都市であったのだから、カナウジの住民の子孫、すなわちロマの文化に仏教的要素が見られることを指摘する必要があるだろう。